
ポケットモンスター 目が覚めたら新種？のポケモンになってました。

きらきらぼし

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター　日が覚めたら新種？のポケモンになつてました。

【Zコード】

N5045R

【作者名】

きらきらぼし

【あらすじ】

ポケモンが大好きな主人公は日が覚めたらなんと新種のポケモンとしてポケモンの世界に！

まずは生き残ることを考えよう。

初めの方はホントに描き始めだったので駄文ですが、後から少しこれ良くなつていっているはずです。こんな駄文でも楽しんで頂ければ幸いです。

なんじゅうじゅああああああああ！（前書き）

一一作目で一す。

なんじゅうじゅああああああああ！――

ある朝いつも同じ日に田が覚める。

またいつもと同じ一日が始まる・・・・・はずだった。
なのに・・・・・

「ガア――――――――――――（ビツヒトヒツ）（うなつたんだあ
ああああああああああ）。」

田が覚めたらなんと俺は黄色と黒の毛皮を持つ狼になっていた。

（何が起こったんだ？ 何か俺、変なもん食ったか？ あれか？ テスト
が悪くて怒られたからポケモンになりてえよ！ とか思いつつ寝たの
が悪かったのか？ でもこんなポケモン見たことねえぞ？）

混乱して色々考えてこらへりてグゥ～～と腹が鳴った。とにかく何
か食べられるものを探さなくてはならない。しかも自分のことに気
を取られていて気がつかなかつたがどうやらここは森らしい。

（森なら適当に歩けば木の実ととが生つてゐるだろ。）

そんな風に思い適当に歩く」と一〇分

「ガア――――（すげー――）」

モモンの実、オレンの実などの木の実を大量に見つけた。実際に食
つてみたことは無いのだが、食べてみるとまい。

そのまま空腹が満たされてきたといひで、今から何をするのかを考
え始める。

(モモンやオレンが見つかったことから) いまポケモンの世界で間違いない。)

世界が分かつたので俺はポケモンになってしまったのだと理解する、だがこんなポケモンは見たことが無い、名前もタイプも分からん。

(じゃあまずはそこからだな。)

とりあえずは自分のタイプを確認しないことには始まらない。そのため自分タイプを確認する特訓を始めるのだった。

「」から始めるマイレガオリューション

この世界に来てから一週間がたつた。

俺はこの一週間で大きく変わった。

タイプがみず・あくだと判明し、あとは死ぬ気で技の練習をしていた。

サバイバル経験が無い俺が生きて行くには自分が強くなるしかないと思ったからだ。

グラエナ、ポチエナの繩張りに入り追い回されたり、ルビー・サファイアに出てくるトレーナーのミツルにゲットされそうになつたりしていた。

最初はみずてっぽうもちょろちょろとしか出さないあたりぐらいしか使えなかつたが、今ではかみつく、アクアジェット、みずのはどう、だましうち等の技を覚えた。

何故そんなにも強くなつたのか?理由はいくつかある。

一つ目は、生き残り、捕まらないため。

二つ目は、ジム＆リーグの制覇がしたいため。

せっかくポケモンの世界にきたのだ（しかも新種のポケモンの姿で）ポケモンがたつた一匹でジムを制覇し殿堂入りするなんて偉業を成し遂げてみたい。そう思つたのだ。

ジムを制覇するには旅をしなければならない。

俺は近くの高台に登り森じゅうに響き渡るような遠吠えをした。この土地にここまでありがとう、さようならといふ思いを込めて・・・。俺の伝説はここから始まる。

『ミツル視点』
「よし。」

準備を終え少し休憩をとる。

今からまたあのポケモンを捕まえに行く。他に見たことの無い青と黒の毛皮に黄色いたてがみをもつ狼のようなポケモンを。

今まで三回捕獲に向かったが、全て返り討ちにあつた。しかも驚く

ことには戰うことに必ず強くなっているのだ。

僕はあいつを捕まえる。そう心に決めもう一度ゲットに向かうのだった。

初のジム戦！・・・でもその前にちょっと特訓

と次々出てくる野生ポケモンをつじきりでなき倒していく。

「あ！珍しいポケモンだ！よーし捕まえるぞー！いけ！ナマケロー。」
「（邪魔じゃあ）！」

たまに出てくるトレーナーのポケモンも大体一撃で沈めて行く。後ろで今倒した短パンこぞうが泣いているけど気にしない。

「」はトウカの森。どうやら俺がいた森は「」の近くだつたらしく今は力ナズミシティに向かいながら特訓をしている。あれから二日たち俺は更に強くなつていた。

「(カニ)」。

と一息。せっかく連続で襲つてやつたポケモンやトレーナーがいなくなつた。

(「それでなぜ休憩できるな。」)

しかし俺も強くなつたものである。初めのことは野生ポケモンにびくびくしながら暮らしていたというのよ。

最近になって俺は特訓により、アケアテール、つじきり、ふいうち等自分のタイプの技に加え、きりさく、アイアンテール等の自分のタイプではない技も覚えていた。

それによつこままでよつも弱点をつかむよつになり戦闘が楽になつ

た。

「（なんが行くか）。

寝床の確保は出来ているが食料はその日じのぎだ。毎日その日食べるだけの食料を集めなくてはならない。起床、特訓、食料集め、就寝。これが俺の一日のサイクル。

いつも就寝前にはジム戦に心躍らせる自分がいた。

初のジム戦！・・・でもその前にちょっと特訓（後書き）

読んでくださいって有難うござります。
ジム戦は・・・次回？

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 前編（前書き）

ジム戦で～す。

お待たせしました。

今回は前編と後編に分けました。

ツツジとのバトルは後編からです。

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 前編

今俺はカナズミジムの入り口の前にいる。

これから始まる戦いに武者ぶるにする。

俺は伝説に至るまでの第一歩を踏み出すため、ジムの中へ足を踏み入れた。

目の前にはバトルフィールドが広がっている。ジムの中はゲームよりもアニメの方に近い。

「何だ？あいつ？」

周りにいたトレーナーズスクールの研修生だろうか？そのうちの何人かが俺に気付いた。

その後こいつらは「あいつはいったい何者なんだ？」とか「何故ここにいるんだ？」とかの話しをしていてバトルも始まらないしジムリーダーもやってこない、流石に退屈に思えてきたので俺はフイードのトレーナーがポケモンに指示を出す場所に入り、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン！……！」

吠えた。俺は戦いにここに来た、と相手に云ふよいつ。

「なつなんだこいつ！俺が相手になつてやるー！」

と言い一人の少年がモンスター・ボールに手を伸ばす。

「いけー！イシッヅブテー！」

ポケモンを繰りだす。

「イシッヅブテー！わおと！」

相手の指示が終わる前にでんこいつせつかで距離をつめつじきり。急所に当たて一撃で沈める。

「なつー！イシッヅブテー！戻れー！いけー！イワーカー！」

速攻でアクアジョット、相手に当たった反動を利用し中へ、そのままみてつぽう、一撃で決める。

「まつ負けたー！」

そして、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オン！－！」

再び吠える。強者を出せと言つよひに。

そしてついに・・・・・

「なんですか？さつきから。」

カナズミジムジムリーダーツツジが現れた。

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 後編（前書き）

後編です！

ついにツツジと対決！

勝者ははたして・・・

初のジム戦！！ 結果は神のみぞ知る 後編

「なんですか？さつきから。」

「ジ、ジムリーダー・・・・・」

ようやく来た。

俺の待ち望んでいた相手が。

ようやく始まる。

俺の待ち望んでいたバトルが。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン！！」

「ジムリーダー！」いつ！

「私と、カナズミジムジムリーダーの私と戦いに来たのでしょうか。
・・・・。」

そうだ、俺はあんたと戦いに来た。だが、それは通過点に過ぎない。

「分かりました。カナズミジムジムリーダーツツジがお相手します。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオン！――！」

俺は再び力の限り吠える。そしてそれが試合開始の合図。

「じゃあねー。イシツブテー。」

相手がポケモンを出した瞬間にアクアジエットで突進する。

「イシツブテ！ 避けて！」

流石はジムリーダー。今までのトレーナーとは違つ。だが、避けら
れるのも予測の内。

俺は前の岩にかみこぎ、体をひねって方向転換。そのままみすてっぽう。

「なつー・イ・シ・ツ・ブ・テー・こ・ろ・が・る・ー・!」

相手は一瞬動搖したが焦ることなく指示を出す。イシツブテは転がつて水を弾きながらじつちに向かってくる、ならばみずてつぽつの勢いを上げ・・・・

バシイン！！！！！

「なつ！」

相手が驚いているうちに追撃のみずのせどりを繰りだす。

みずのはどうが相手を包み込む。

「イシツブテー！」

起き上がる気配は無い。瀕死になつたようだ。

「イシツブテ、戻つて下さい。いきなさい！ノズバス！！」

出た。相手の切り札、ノズバス。

今勝てたのは当然ともいえる。相手は本気ではないのだ。

おそらくこのノズバスもジム戦専用のポケモンであり彼女は完全には本気じゃ無いと思うが、ジム戦時の彼女が本気を出した。

「ノズバス！がんせきふうじ！！」

俺は直ぐ上に跳んで避ける。すると・・・

「ノズバス！でんじほう！！」

来た！電気タイプの中でも高威力で命中は低いが当たれば必ずまひになる厄介な攻撃。

ない状況だ。なら・・・・

みずのはざいで押し返す！！

ドオオオオオオオオオオオオオン!!!!

水と電気がぶつかり合う。そして・・・

でんじほつは俺めがけて貫通してきた。

バチイ！！！

「グオオオオオ！」

体中に鋭いしひれが走る。体が動かない、まひしたようだ。

「終わりです。ノズバス、がんせk

相手が俺にとどめを刺そうとした瞬間に、俺はアクアジェットでノズバスに突進した。

ドカア！！！

「なつ！」

クリーンヒット。仕返しだ。

「何故・・・・」

俺がまひしたはずなのに早さが下がらず動ける理由は至極単純。ラムの実だ。

このジムに入る前に持つておいた、それだけ。だが、相手はそれに気づかず混乱している。そのすきに攻めさせてもらつ！

俺はでんこうせつかで距離を詰め始める。

「くつ！ノズバス！－いわおとし－！」

そんな攻撃当たらない。降つてくる岩を避けつつ的確に距離を詰めていく。

「ノズバス！がんせきふうじ－－」

アクアジェットを使い、更に加速。拘束される前に避ける。

そして一気に距離を詰め、勢いをそのままにアイアンテールを繰りだす、しかし……

「ノズパス！でんじまつーー！」

相手は避けようとせざそのままカウンターを繰り出してきた。

そして俺のアイアンテールと相手のでんじまつは

同時にお互いにヒットした……。

決着

「クルル。」

目が覚めた。どうやら気を失っていたようだ。確かジム戦で・・・

「目が覚めましたか?」

後ろで声がしたので反射的に身構える。声の主はツツジだった。

「落ち着いてください、貴方に危害を加えるつもりもゲットするつもりもありません。」

その言葉を聞き俺は構えを解く。

「ジム戦の結果は引き分けです。貴方はあの後私がここまで運びました。」

・・・・・・・・・うか。やはりまだ早かったのか。もう一度修行のやり直しだ、と思いつつの方へ向かう、しかし・・・

「待つて下さい。」

呼び止められた。何故?

「貴方はリーグを制覇する気があるのでですか?」

と聞かれた。当然俺はうなづく。

「ならこのストーンバッヂを受け取って下さい。」

・・・・・・・は？

「トレーナーの指示無しにあそこまで戦えるポケモンを私は初めて見ました。それにポケモンが、それもたつた一匹でリーグを制覇するなんてところを私は見てみたいのです。」

しかし・・・・・ジム戦に勝つていないのでから受け取るわけには・・・

「どうか受け取つて下さい。貴方の実力はこのツツジが認めます。」

・・・・・どうやら俺は過大評価をされているようだ。だが、くれると言うのなら受け取つておこう。

俺がストーンバッヂを受け取り外に出ようとすると、

グウ~~~~~

腹が鳴った。それもかなりのボリュームで。

「ふつクスクス何か食べて行きますか？」

その日俺は久しぶりに温かいご飯を食べ、温かい寝床で眠った。

次はどこで戦うかなー・・・決まりのナビ。

「また来てくださいね。」

ツツジにそう言われコクリと頷く。

昨日は本当にお世話になった。

風呂に入れてもらつたりもしたし。久しぶりのお風呂は格別だつた。俺は再び歩き始めた。いつまでもツツジに甘えているわけにはいかない。

次にどこに行くかはもう決めてある。フエンシティだ。カナズミから陸で繋がっているし、ジムのタイプが自分と相性がいいのだ。今回ジム戦を経験して分かった。今までは駄目だ。もつと強くなる必要がある。そのためにはもっと修行し、ジム戦にも慣れておく必要がある。

もともとジム戦に順番なんか無いのだ。ゲームでは都合上あの順番に回るしか無かつたのだ。

ならば自分に有利なものから攻略していくつもりも修行させてもらおう・・・というのが俺の考えだ。

問題はルートだ。ここからフエンに行くルートは一通りある。一つはカナシダトンネル、シダケタウン、キンセツシティを通るルート。もう一つはりゅうせいのたき、ハツシゲタウンを取るルートだ。言つておくが、カナシダトンネルやりゅうせいのたきの中を馬鹿正直に通る必要は無い。

こつちはポケモンなのだ。周りの険しい山や深い森を通りていいくつもりだ。

だが、本気で迷っている。え?早く決める?それが出来たら苦労せんわ! !

俺はなんとなく自分の耳を前足で触る。耳ではない堅い感触が伝わってくる。そう、俺はツツジにバッヂを耳に付けてもらつたのだ。

その時にいろいろ撫でられたりもしたが……。俺はその時ツツジが言っていた言葉を思い出す。

『待っていますよ。貴方がホウエンリーグチャンピオンになる日を。』

『

・・・・・・・ そうだ、俺は一刻も早くチャンピオンにならなく
ちゃいけないんだ。

俺に期待してバッヂを渡してくれたツツジの為に。となんか臭いが

これは事実だ、だったら・・・

ルートなんか直感で決めちまえ――――――

・・・・・・ どうひしょかなてんのかみやまのこうとうコースとよ
し決ました――

よつしゅやーー、いぐゼーーー、絶対ジム&リーグ制覇してチャンピオンになつてやるーー！

全速前進DA　～思いがけない再会～ 前編

「「オオオオオオオオオオオオ（無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア）！…！」

さつきから次々出てくる野生ポケモンやトレーナーをなぎ倒していく。

前にも同じような事があつたが今回はあの時以上の速度だ。結局俺はりゅうせいのたき、ハツシゲタウンを通るルートでフエンに行くことにした。

理由は一つ、シダケを通るルートだとミツルがいるのだ。あいつはかなりしつこかつた。何度も撃退してもまたやってくる。今はみんなに時間を取られたくないのでもちらのルートを選んだのだ。

「いけ！ ワンリキー！」

「ヴォオオオオン（ビケーー）…！」

相手に一発づばめがえし。瞬 殺！

俺はこの道中での連戦によって、多少はレベルアップしていた。使える技も増え、絶好調だった。

・・・・・はずなのだが

「おい！ いたぞ！」

「どこだ！」

「こっちだこっちー！」

現在俺は十何人のトレーナーの大群から逃げている最中である。どうして追われるのかは分かる。単体でジムリーダーと引き分けたポケモンなんて広がらない方がおかしい。

あの場にはツツジ以外にも何人も人がいたのだから。

「いたーー！ いけマッスグマ！」

「見つけた！ GO！ ズバット！！」

「発見！ ゲットしてやるーいくんだ！」ローラン！」

「ガウア————（くそ————）————！」

誰か助けてくれ————！！

「キルリア、シャドーボール。」

どこからかその指示が聞こえ、俺が身構えた時には

『俺を取り囲んでいたトレーナーのポケモンが一匹残らず瀕死になつていた。』

そして

俺の前には

あの少年が立っていた。

「久しぶりだね。今度こそゲットさせちゃうよ。
「グルル（ミツル）・・・・・」

「久しぶりだね。」

「グルル（ミツル）……」

くそ・・・いろんなところにこいつがいるなんて・・・こんなことならあんなことあるんじゃなかつた。

（回想）

「（どうかうしょかなてんのかみやまのいりとりの一つとよし決ました！）」

結果はシダケ、キンセツ等を通るルートだ。よし行こうと思つた瞬間あの少年の事が頭をよぎつた。

「（やうごいやシダケにまみつるがいるんだつけ）」

・・・あんなやつに時間は取られたくないな・・・

やつぱハツシゲルートこじょーつヒ。

（回想終）

「つやーなんである時俺は自分の直感を信じなかつたんだー···。と俺が過去の過ちを悔んでいると。

「あれ? その耳に付けているのはもしかしてジムバッヂ?」

ミツルが言つ。どうやら耳に付いているジムバッヂに気がついたよつだ。

「はあ~。これで君に勝てると思ったのに···。君は本当に僕の予想を上回つてくれるね···。」

と言つながらミツルが取りだしたもの。それは···。

「ガウッ (それは) ···」

「そう、キンセツジムのバッヂだよ。」

ダイナモバッヂだった。

あいつはやはり恐ろしいな···。こんな短期間でジムリーダーに勝てるほど強くなるなんて。

「じゃあそろそろ無駄話はやめようか。」

「グルル (そうだな) ···」

あいつと俺とを取り巻く空気が一変する。

そして・・・

「いぐよ。」

「ガア（来い）ー。」

戦いの火ぶたが

切って落とされた。

全速前進DA　～思いがけない再開～ 後編（後書き）

バトルを期待していた皆さんへ、

ごめんなさい！

バトルは次回です。

次回「強者」

読んでくださって有難いござります。

「いくよ。」

「ガア（来い）！」

戦いの火ぶたが切つて落とされた。

「キルリアー！ シャドー ボール！！」

ミツルの指示とともに相手のキルリアがシャドー ボールを放つ。だが、そんなもの当たらない。でんごしせつかで避け、距離を詰め始める。

「連射だ！」

あいてのシャドー ボールの数が大量に増えた。だが俺は焦ることなく冷静に避けて行く。

「やるね・・キルリアー！ でんげきは…！」

だが、次の瞬間相手のキルリアが避けられないほど早い電撃を放つ。それはまるで槍のように俺に迫ってくる。

でんげきは必ず当たる技だ。ならば・・・

「「オオオオオオオオオオオオ！」

みずてつぽうで押し返す！

そしてお互にの技がぶつかり合い相殺される。

「なつ！」

「ガア（嘘）！？」

完全に押し返すつもりだったのに相殺された。

((やつぱ))(((・・・・・つよこ)))

「キルリアーでんげき！」

「ガア（させらるか）！」

アクアジエットで突撃し相手の技をキャンセル。

「くつ！」

「ガアウ（まだまだ）！」

そのままみずのはじづ。これで・・・

「かげぶんしん！」

決まったと思つたら回避されたよ・・・くつそー全方位攻撃で分身全部つぶしてやるー

「キルリアーでんげきばー！」

全方位からの集中砲火。これに対しても俺は、

あくのばどりで迎え撃つ。

わしどあぐのせうひはでんせきは押し返し相手にケリーンセツ。エ

一
キルリア
!

(これは流石に起き上がれなしたぞ……)

だ
が

相手は起き上がつた。

「キルリア！！」

(起き上がった!?)

ギルリア少し休んでくれ。

ミツルはそう言ってキルリアをボールに戻す。

「次、行くよ。君を捕まえる為に捕まえたポケモン。行け！」ゴーリキー！！

二体目のポケモンは「ゴーリキー」だった。くそつ相性が悪い……だ
が！

「ゴーリキー！ からでチヨップ！！」

俺はでんじうせつかで避けて、カウンターにつばめがえしを叩き込む。

一撃で決めれば問題無エー！！

そしてツバメ返しは相手に直撃し・・・・・・

相手は

耐えた。

「ガツ（なつ）！？」

更に、

「ゴーリキー、カウンター。」

ドスッ！！！

鋭いカウンターが俺に直撃した・・・・・・

「よし……。」

今のカウンターは完璧に入った。弱点を突かれたことに驚いたが、そのおかげで結果的に威力は上がった。
これならもう起き上ることは……いや、起き上がりてくるだらう。

それが分かつているからこそ少年は一切油断することなく空のボールに手を伸ばす。

(もうボールを投げてもいいのか?)

と思い、ボールを手に取った時、『アイツ』は起き上がった。

(くつそー! やられた!)

そう心の中で悪態付きながら痛む体に鞭打って起き上がる。
足はガクガクと震え、体が軋んでいる。
まさかここまで成長しているとは思わなかつた。
素早い相手に対抗する為、わざと一撃食らつてからカウンターを叩き込む。

シンプルだがなかなか効果のある作戦だ。

(どうする?このダメージじゃ逃げる」とも撃退することも難しい。)

俺はこの世界に来てから生き残ることを最優先に考えてきた自分の脳をフル回転させる。

今考るべきはこの状況を脱する方法。

そのことのみを考え俺の脳みそは回り続ける。

(あいつのポケモンが一体のみとは限らない。これが今のところの一番のネックだな。)

実のところ、相手のポケモンがあの一体のみならこの状態でも勝てる自信はあった。

ゴーリキーは弱点を突かれたことによりもつ立っているのがやつと。キルリアも同じだ。

それにその一體は俺より遅いため俺は先制攻撃が出来るのだ。だが、相手が他にもポケモンを持つていれば俺が詰む可能性は急激に加速する。

自分にとつて有利なタイプなら何とか行けるかもしれないが、不利なタイプなら・・・・

いや、ネガティブな考えはやめよう。本当にそうなってしまう。ミツルがゴーリキーに何か指示しようとする素振りを視界の隅に捉えた為俺は一旦思考を中止し相手を見る。

今俺と対峙している少年は、

笑っていた。

「あれでもまだ起き上がつてくるか・・・まあそりだとは思つてい
たけどね。」

僕は呆れと喜びが入り混じつたような感情が出てくるのを感じてい
た。
あの様子だと、だいぶダメージを貰えはしたがゲットするためには
もう少し体力を減らさなければならぬだろう。
だが、

「楽しいよ。君とのバトルは。」

僕はまだまだこのバトルを楽しみたい、ここで逃がして、もう一度
今度はお互い今よりもっと強くなつてまたバトルしたいといつこと
を思い始めていた。

「いや、僕は一体何のためにここまで頑張ってきたんだ。」

そう、他でもないあのポケモンをゲットするためではなかつたのか?
僕は雑念を振り払い意識を相手へと向ける。

「そろそろ行かせてもらおうか。」

アイツがこちらを見る。軽くないダメージを負つているはずなのに
その瞳には今なお闘志が宿つている。

「ゴーリキー、けたぐりだ。」

僕は「ゴーリキーに指示を出す。指示を聞いたゴーリキーは相手にその技を当てるべく相手の下へと向かっていく。
だが、その攻撃はアイツには当たらない。素早く跳躍し回避する。
しかもそのままアイツはみずてっぽうを放つ。マズイ、今のゴーリキーじゃこの攻撃は避けられない。

「ゴーリキーまもるだ！」

とつやに指示を飛ばす。僕の指示どおりにまもるを使ったゴーリキーはなんとか攻撃を防ぎきる。

しかし、相手の攻撃はこれでは終わらない。続けざまに追撃のアクアジエットで突っ込んでくる。

突然のことに対応が遅れ攻撃は直撃する。

「ゴーリキー……」

今のが攻撃で吹っ飛ばされたゴーリキーに声をかけつつ駆け寄る。
ゴーリキーは瀕死状態になっていた。

「くっ……ゴーリキー、戻ってくれ。」

ボールを取り出しゴーリキーを中心に戻す。

「出でこーーキルリアー！」

次だ！まだ僕は戦える！

キルリアもそんな僕の感情に応え気合いが入っている。

「さあ行くぞ！まだまだこれからだ！」

（よし。なんとか一体は倒した。）

だが油断はしない。一瞬の油断が原因で敗退した例も多い。
相手も、そのキルリアもその闘志は消えていない。
こちらに少しでも隙があれば、即座に攻撃してくるだろ？
俺自身もそろそろ限界だ。なるべく早めに終わらせて休み体力を回
復させる必要がある。

俺を追つてきているトレーナーはこいつだけではないのだ。今のよ
うな状態で何十人ものトレーナーに突撃されて逃げ切る自信は無い。
しかし、焦りは禁物だ。相手のポケモンがこれだけだと決まったわ
けではないのだ。

焦つて伏兵の可能性を考慮しなければ負けるのは俺の方かもしれな
いのだから。

両者の気が激しくぶつかり合って火花を散らす。

これが最後の攻防になることはお互いに分かっていた。

そしてお互いが大技を繰り出そうとした、

まさにその瞬間。

「
？」

「ガ（え）？」

あまりにも突然の事態に俺とミツルの二人は固まってしまった。

だが

「どうだ――――――!?」

二二七

そんなやり取りがだんだん近づいてきていることに気がついた俺は慌てて逃げ出す。

「なつ！逃げるな！」

ミツルがなんか言つてこるがそんなの気にしてこる場合じゃない。
でんじうせつかを使ひたつとこの場を離れる。

少しずつ声が遠ざかっていくのを聞きながら俺は自分の力不足を感じ深く落ち込んだのだった。

「はあ・・・・逃げられたか。」

追跡しよつにも既にキルリアはぼろぼろだ。アイツの速度を考えると今から追跡しても、追いつけないだろう。

(もし邪魔が入らずにあのまま勝負していたら勝てただろうか?)

ふと、そんなことを思う。

確かに僕は前までは手も足も出なかつたアイツにそこそこ大きなダメージを与えた。

だが、手持ちが深手を負つたキルリアだけのあの状態で、相性も不利なあの状況で、

勝てただろうか?

・・・・・たぶん、負けていただろう。

とりあえずは、もつともつと強くならなければアイツには勝てない。

それが分かつただけでも収穫かな。

その少年は負けたにも関わらず、清々しい笑顔だった。

「ハアハア」

（どうやら逃げ切れたようだな。）

あの後俺はかなり必死に逃げていた。

戦闘で傷ついた後に全力疾走させられて・・・ぶつ倒れそうだ。

（マズッ・・・）

とうとう耐えきれずに俺は倒れてしまった。そのまま抗うことできず俺の意識は闇に沈んで行つた。

強者 後編（後書き）

今回は他の方から少し短いのでもう少し長くした方がいいとの指摘を受けた為、長くしてみました。どうだつたでしょうか？

私は文才が無いただの駄目作者ですが、皆さんのが少しでも読みやすい小説を書くためにこれからもがんばっていこうと思します。
批判、指摘、アドバイス等がありましたら教えて下さい。
その点を改善していくつもり思います。

婆ちゃん凄えなーーー！

「グア（んあ）？」

・・・・見知らぬ天井だ。

あれ？あつれー？

俺は周りを見渡してみる。

白い壁紙、ごく一般的な薄型テレビ、フツーのタンス。

マジで何処？！。っていうか俺はどうやってここまで来たの？

「おやおや。目が覚めたみたいだねえ。」

と、不意に声がかかる。

俺はその方向に顔を向ける。すると・・・

誰かは分からぬが結構なお年に見えるお婆ちゃんがいた。

「とつあえずはもう少し休んでおくんだよ。」

そつ言つて台所の方へ消えていく老人。

・・・「パベー？」

「だいぶ良くなつたみたいだねえ。」

俺の目が覚めてから一時間ほどたち、俺はだいぶ元気になつていた。食事をごちそうしてもらい、ゆっくりと休ませてもらつた。

しかし・・・・」の婆ちゃんは一人暮らしみたいだな、家族の人気が誰もいない。

俺みたいな見知らぬ野生ポケモンを家の中に入れていいのだろうか・

「でももう少し休んでおくんだよ。」

と言われ、俺は「ククリと頷く。それに対して婆ちゃんは一コリと笑い。

「じゃあ私は水を汲んでくるからね。」

と言つて外へ・・・・とちょっと待てえ！！

婆ちゃん、老人が、それに女性が一人で水汲みですとー?無謀にも程がある。

俺は後を追うように外へ出た。
そして、驚いた。

周りに家が全くないのだ。入口から見て右側には木々が、左側には

岩山があつこじの家はそれなりに囲まれている。

こんな所にたつた一人で……と懇ご懇を見よつとすゐと家の前の看板に気が付く。
その看板にはいつ書いてある。

『ケンコーおばさんの家。』

・・・・え?ええ?

この方が、この方があのケンコーおばさんなのですか?
ゲームでものすごい世話になつた。あの?
つてことはけんこはーーー番道路?

・・・・マジックか・・・。

と衝撃の事実に硬直していると、

「うひうひ。ちやんと家で休んでなくちや駄目じゃない。」

と婆ちゃんが言つてくるが、世話になりっぱなしなのにもかかわらず何もしないのもいけないと思つて行つとする。
すると婆ちゃんは、

「ホントー!ホントーに大丈夫かい?」

と聞いてきたので大丈夫だと証明するために力いっぱい頷く。

「そうかい。じゃあお願ひしようかねえ。」

そんなわけで俺は婆ちゃんと一緒に水汲みに行くことになった。

「じゃあ行くよ。」

と言った瞬間、婆ちゃんの姿が消える。衝撃の余波により砂ぼこりが上がり、俺は吹っ飛ばされ木に頭から突っ込む。

思いつきり突っ込んだため色々な太さの枝が折れている。

一瞬何が起きたか分からなかつた。

どうやら婆ちゃんが走り出した瞬間にそのあまりの速度にソニックブームが発生し、俺が吹っ飛ばされたらしい。

(確かにケンコーだなあ。)

そつ思つた瞬間、俺は再び意識を手放した。

「クル（あれ）？」

知らない天井、本田一回目。

「田が覚めたかい？だから家で休んでおきなと言つたのに。」

いや、婆ちゃん・・・あれはそういう問題ではなく・・・

「いいかい。今度こそしっかりと休んでおくんだよ。」

いや、あの、・・・行つてしまつた。
婆ちゃんが夕食の準備を始めてしまつたため、俺は暇になつた。
そのため、明日からどうするかを考え始める。

まずは状況を整理しよう。

1・まやじは111番道路のケンコーおばさんの家である。

2・俺はだいぶ回復している。

3・フンに近くなつたことにより行くことが容易になつた。

とつあえず予定とは違うが「あら」として良い状況になつた事はあ
・・・・ぐらうだらうか？

りがたい。

明日になつたら、直ぐにフロント席と交換。

だが今は、

「今飯が出来たよー。」

もつもじの暖かさに触れていきたい。

そう思った。

繆ちゃんと凄えなーーー(後書き)

今日はバトル無しです。
流石ケンコーおばさん。(何が流石なのかは良く分からぬ)

フロン到着！～やまつ温泉は最高だつた～

「じゅあねえ。また来ておくれよ。」

俺は領き、婆ちゃんに見送られながらその家を出る。

この後の予定は、まっすぐフロンに向かう。

俺の予想だと余程の事が無い限りは、今日中に着ける筈だ。
ルートも昨日俺の頭の中のホウエンマップで最短ルートを導き出したのだ。

なお、その脳内マップは8割がつる覚えである。

まずは、そのままのぬけみちに入りそのまま1~2番道路に行く。

さって、行くかあ。

…………暑い。

なんでこんなに暑いの？と暑さのあまりバカな疑問を抱く俺。

ほのおのぬけみちなんて名前なんだから暑いに決まっているだろ！
が！！！

だが、出てくるポケモンも炎タイプが多く、俺にとっては、意外と
良い修行場所である。

…………暑さをえ無ければ。

だが、この暑さで流れる汗もフエンの温泉で洗い流そうと思えばい
いか・・・

など、もはや観光でしかないよつなことを考えながら出でてきたコー
タスにアクアテールを食らわして仕留める。

…………たしかフエンのジムは暑いんじやなかつたっけ？

嫌だなあ・・・軽く鬱になりやう。

ココだけの話、俺は暑さが何よりも苦手だ。だから夏は毎年地獄を見ていた。毎日クーラー、ガンガン。しかもその部屋でアイス等を食べるありさま。まあ、ここまで普通だろう。だが本当に暑がりな俺は冬にもクーラーを付けたりしていた。

あつついなあ〜〜

もはや俺の頭の中は早くここから脱出することしか無かった。

(ふりふり。)

五分ぐらいして、ようやく俺はある地獄サウナから脱出し112番道路の南側に来ていた。

そう、あのロープウェイ乗り場がある場所である。最初に来た時にアクア団。ママ団のよつて入口がふさがれている場所である。

・・・あれって、うざこよね・・・

まあ過ぎたことないはずでまだほんの少しでもくればほんのもう少しと鼻の先。

ここはゲームでは段差があり、右から左へ(キンセツからフンへ)行くことが出来ない。

だが・・・・・

フツーにとび越えればよくな?

と囁ひ結論が出て早速実行。

結果・成功。

あれー?こんなにあつさりいってもいいのかな?

・・・・まあいいか。行けたことだし。

さてと・・・改めてフエンに入るか。

(おお~~~~~。)

温泉も砂風呂も、生で見ると一味違うな。

因みに今はもう夕方である。そんなに時間がかからなかつたにも関わらず何故鴉が鳴いているのか？

それは俺が夕方近くは家を出たからである。

その理由は、まだ術を猶豫しているが過くにはいることも考へた。泉には夜に入らうと思ひ、なるべく丁度良い時間になるようにしたのである。

も少し暗くなつたら温泉に入りに行こうと考えてゐるためには

砂風呂じや――――――！

人間初めての事に関してはテンションが上がるものだ。何?今はボケモンだろ?

・・・・・キニスンナ。

そ～て砂風呂に入るか。

……………、じつせんひ寝てしまつていったよつだ。

「ガーンー？」

もつねは真っ暗だ。

そろそろ温泉に入らうかな。

いい湯だな

これだけでもここに来た価値はあつたな。

な~んて事を考えつつも明日の事を考える。

(たしかここジムリーダー、アスナのポケモンはオーバーヒートを覚えているのが多い。)

明日は絶対に勝つ。そのためにここに来たのだから。

そのためこもいの温泉で、しっかり疲れを取つておこう。

フーン到着！～やはり温泉は最高だつた～（後書き）

ジム戦～戦闘開始～（前書き）

一作品同時執筆最初の更新です。

頑張つて行くので、どうか温かい・・・なんて贅沢は言いませんので、冷たくない程度の田で見守つて下さい。

ジム戦～戦闘開始～

(よし。)

俺は今、フHンジムの前に来ている。
そう、今日俺はジム戦をしに来たのだ。

(行くぞー！)

ウイーーーン（自動ドアの開く音）

もわわわ～～～～ん

「「オ――――――（暑――――――

！」

「ハアハア・・・・・・・。」

（何だあのジムは！？ドアが開いた瞬間にこいつ、もわわわ～～～んともすじい熱気が。）

フエンジム。ここは想像以上に厳しい戦いになりそうだ。

だが、俺に元より後退の文字は無い！

いざ行かん！

「ふう・・・・・。」

私はフエンジムジムリーダーのアスナ。

最近ジムリーダーになつたばかりの新米だ。

最初のころは右も左もわからなくて挑戦者にも迷惑をかけていた。

だが、経験もそれなりに積んで、そこからマシになつてきたと自分でも思えるぐらいにはなつたと血食してこう。

ウイー——ン

ドアの音だ。挑戦者？

「アホ———」

「ひこーー。」

と思つてこむと、ドアの方からものすごい咆哮が聞こえてきた。

いっ、一体何？

(やつぱつ中は暑いな・・・)

覚悟を決めて、ジムの中に入った俺はやはり暑さに慣れないでいた。

あまりの暑さに汗をかきながら周りを見渡す。
気温以外は力ナズミジムと大差は無いみたいだ。

俺が周りを見渡していると

「さつさんの声は君？」

後ろから声がしたので振り向く。

そこにはフエンジムジムリーダーのアスナが立っていた。

俺は、質問に対して肯定の意思を示すために頷く。

「何しに来たの？」

一つ目の質問が飛んでくる。

それに対し俺は、戦いの意思を示すためバトルフィールドに入り

咆えた。

俺の咆哮がジム内に響き渡り、その余韻を残す。

俺の意思に応えるかのように、アスナもその闘志を燃やし

「行け！マグマッグ

！..！」

ポケモンを繰り出してきた。

炎と水の戦いが今、幕を開けた。

ジム戦～戦闘開始～（後書き）

今回は少し短いです。
戦闘は次回からです。

炎VS水 ～ぶつかり合戦～ 前編

相手のマグマッグと俺はお互いにまだ行動を起しえず睨みあつている。

お互いに動かず、シンと静まり返る空間。相手のマグマッグの体表がパチパチと爆ぜる。

あまりの暑さと緊張のあまり俺とアスナからは絶え間なく汗が流れ落ちる。

ピチヨン、ピチヨン、ピチヨン

パチ、パチ、パチパチ、パチ

そして、お互いが動いたのは全くの同時だった。

「マグマッグ！スモッグ！」

(毒にする気か……)

俺は放たれた紫色の気体をみずてつぼうで無理やり霧散させる。反撃しようとした頃には、アスナは既に次の行動に移っていた。

「ひのーー！」

俺は攻撃の軌道を見きり、最小限の動きで回避。そのままみずのはどつを放つ。

「いわおとしー。」

相手は自分の周りに岩を落とし、その岩に隠れ広範囲に広がる波動を避ける。

(やるな・・・)

アスナはゲーム内だと新米のようだが・・・

(ジムリーダーの名は伊達じや無いという訳か・・・)

「のしかかりー。」

飛びかかってくる相手にカウンターとしてアクアテールを当てる。

ドゴンッ！――！

相手は地面に叩きつけられ、そこから砂ぼこりが巻き上がる。
煙がはれると、そこにはクレーターの中で目を回す相手の姿があつた。

「ツー戻って、マグマッグ。行って！バクーダ！」

(次はバクーダか・・・)

相手のタイプは炎・地面。水タイプの攻撃は通常の四倍。相性面では俺の方が有利だ・・・・しかし、前回戦ったツツジは相性が不利にもかかわらず引き分けにした。

タイプが不利でも勝てる戦術。それを相当考えているようだ。今回のアスナも同じだ、みずのはどうの水流をいわおとしの岩を盾にして防いだり・・・やはり一筋縄ではないようだ。

「バクーダ！たいたたり！」

カウンターを取ろうかとも思つたが、この体重差では俺の方が押し負けるので回避を選んだ。

さらに俺はフィールドにみずのはどうを放つ。

みずのはどうは一瞬でフィールドを水浸しにした。

さつき出来たクレーターにも水は溜まり、大きな水たまりになつている。

(これである程度の動きと、マグニチュードは封じた。)

全てのポケモンに言えることだが、あいつらは自分が苦手なものには近づけない。

例えば、サイドン、ゴローニャ、ヒノアラシなどの水が苦手なタイプは水辺に近づかない。

クレーター内の水たまりのせいでもうかつに周りには近づけないし、マグニチュードなんぞ使おうものならその振動によつて水が跳ね、余計なダメージを負う事になる。

ぶつちやけ、クレーター内に俺が押し込んで良い。

それが分かっているのか、アスナも苦い顔をする。

だが、直ぐに鋭い顔へと変わりバクーダに指示を出す。

「バクーダ！メロメロ！」

メロメロ！？そんなのも覚えてんのか！

こいつは当たつたら洒落にならん。

俺はハート形の弾を軌道を読んで的確にかわす。

「メロメロ！」

さつきから同じのしか撃つてこないな・・・一体何が目的
ツ！！

急に地面が消え、足を踏み外す。

俺の後ろにはさつき俺が作ったクレーターがあつた。

「バクーダ！オーバーヒート！」

（クソッ！）

さつきまでのメロメロの連打はこの為の布石だつたのか！
避けることはできるが、それをするとこのクレーター内の水が全て
蒸発するだろ。

そんなことになれば俺は一層不利になる。ならば、
賭けるしかない。

俺にとつてとても不利な賭け。

だがこの賭けで勝負が決まるかもしれない。

・・・・・ やつてやるー

こんなにワクワクしたのはこの世界に来てから一度のみ、ツツジと

のジム戦以来だ。

(いぐぜ・・・)

俺は力を最大限まで溜め、

ハイドロポンプを放つた。

「よしつ・・・」

追い詰めた。アイツの後ろにはクレーター、水を溜められたときには焦つたけどこうなればこっちのものだ。

「バクーダ！ オーバーヒート！ ！」

私はバクーダに指示を出す、これなら避けられないだろ。そう思つていた・・・

だが、次の瞬間。アイツはなんとハイドロポンプを撃つてきたのだ。

(嘘！？)

「ここまでなんて・・・。アイツの実力を見誤っていた・・・。

ここはせんじらのトレーナーなんか田じや無い程強い。

ハイドロポンプとオーバーヒート。炎と水。赤と青。

一つの力がぶつかり合い

すさまじい爆発と煙が起き、立っていたのは

奴
だつ
た。

炎VS水 ～ぶつかり合う力～ 後編（前書き）

さあ決着です。

炎VS水 ～ぶつかり合う力～ 後編

お互いの大技の激突。

それは大きな爆発を引き起こしフィールド中に砂ぼこりを広げた。

「くっ・・・」

はたして奴は立っているのか？

砂ぼこりが晴れ、そこに立っていたのは

奴だった。

ちこんでも相殺が精々。

（なんとか大ダメージは凌げたか・・・）

爆風に巻き込まれはしたものの、ヒット中にクレーターの中に隠れ、大きなダメージは避けた。それに対して相手は爆風をモロに食らった為、そこそこ大きなダメージになつているようである。

（攻めるなら・・・・今！）

俺は止めを刺す為に、相手との距離を詰め始めた。

「マズイ・・」

相手が距離を詰め始めた。

バクーダには相手の攻撃をかわせるような機動力は無い。

今の体力と奴の攻撃力を考えると、おそらく一発で〇させられてしまうだろう。

それにこの状況で使える技にも限りがある。

オーバーヒートはおそらくもう意味を成さないだろう、メロメロはさつき使いすぎたせいでPPが殆ど残っていない、マグニチュードなんか使つたら跳ねる水で自滅することもあり得る。

そんなことを考えている間に、奴はもう直ぐそこまで迫ってきていた。

「――――ッ！―バクーダ！たいあたり！」

苦し紛れに指示を飛ばすもあつさりかわされカウンターのアクアターを受けてしまった。

頭にクリーンヒットしゅっくじと倒れるバクーダ。倒れると同時にドサツッという重みのある音が響く。

「バクーダ、戻って・・・・・」

強い。

アイツは強い。

おそらくここに来るためには相当な修羅場をくぐってきたのだらう。

だが、

私も負けたくない。

負けるわけにはいかない。

「行つて！―コータス！―」

刮皿しぐ。

この私。フエンジムジムリーダー、アスナの闘志を。

「行つて！！コータス！！」

(やはり最後はコータスか)

俺はある程度予想していたことだったのであまり驚かない。まあ、対策なんて全くできていなが・・・たしかアイツは「しろいハーブ」持っていた・・・と思つ。

(オーバーヒートの威力が下がらないのは痛いな・・・)

さつきのバクーダに勝てたのは、オーバーヒートの威力が下がつていたからでありもう一発同じ威力で撃たれていたら俺は負けていた、負けなかつたとしても大ダメージは免れなかつただろう。

(さて・・・どうするか・・・)

しばしにらみ合いが続く。

だがその間もお互いに少しづつ動き相手の隙を窺っているため、ザリ・・ザリと砂利がこすれあう音が聞こえる。

戦う前はそれなりに整っていたフィールドは今やとにかく水没している。

そして先に沈黙を破ったのは俺だつた。

アクアジェットで一気に後ろに回り、みずてっぽうを放つ。

「かえんほつしゃー！」

だが、直ぐに方法転換しかえんほうじゅで相殺していく。

(早いな……)

再びにらみ合いが始まった。

(早い……)

さっきの回り込みからのみずてつぽう。

あれに反応出来たのは運がよかつただけかもしれない。

相手がまた後ろに回り込む、そして今度はアクアジョットで突っ込んできた。

「からにこむるー。」

だが、次の瞬間。「一タスは己の堅い殻に潜り身を守った。
相手は弾かれ中に舞う。

しかしそのままみずのはじりで反撃してくる。

「ツ……かえんほうしゃ……」

とつとも指示を出し攻撃を相殺する。

(「のままじや埒が明かない……）

よし、

勝負に出よう。

「じりこきつ……」

相手が動いた。

(霧に身を隠しての不意打ちか……)

策としては悪くない、だが数多くのトレーナー達に待ち伏せ、不意打ち、その他もろもろのことをされている俺はその戦法には慣れている。

俺はアクアジョットで霧を晴らしながら相手に突撃する。

「からにこまる……」

ガキイ！！

俺とコーラスがぶつかり合った俺は弾き飛ばされる。この状態だと回

避が出来ない為、牽制としてみずてつぽうを放つ。

「避けて！」

相手に攻撃を避けられたがその隙に俺は着地「オーバーヒート!」
何!?

(着地と同時に大技。確かに良い戦法だが・・・ここで!?)

避けることは不可能なので、ハイドロポンプで迎撃する。だが少し
ずつ押され始める。

(!)

危険だと判断しアクアジエットで空中に緊急離脱する。

「オーバーヒート!!」

もう一発！？」ここで決めるつもりか！

軌道を変えても避けきれない、だからといって迎撃也不可能。

(۱۷۲)

少しでも直撃を避けようと軌道を変える。

次の瞬間

巨大な炎の壁が俺の体を包み込んだ。

「やつた・・・」

はつきりとこの田で見た。直撃だ。

流石にあの状態でオーバーヒートを食らえば倒れるだらう。
だが、奴は悪い意味で私の期待を裏切った。

奴はふらふらの状態で立ち上がってきたのだ。

「なんで・・・」

奴はまだあきらめていない。

奴の眼にはまだ闘志が残っている。

いくら奴がぼろぼろといつても、大技の連発でコータスも息が荒い。

おそらく次が最後の攻防。

「コータス！！オーバーヒートオオオオオオオオ！！！」

私は力の限り最後の指示を叫んだ。

私の攻撃に対し奴はハイドロポンプで迎え撃つ

そして

青と赤の軌跡が交差した瞬間

赤は青に飲み込まれ

そのままコーラスを飲み込んだ。

戦いの後に・・・（前書き）

学校が始まったー！

忙しくなつてまいりました。

更新ペースは結構下がると思います。

戦いの後に・・・

(・ ・ ・ ・ ・)

知らない天井・・・最近多いな。

田を覚ました俺はあたりを見渡す。・・・・・普通の部屋だな。

窓から外の様子を見ると真っ暗で、月が出ていた。どうやら、夜まで寝ていたようだ。

さて・・・・・どうするか、と思い始めた時に近くでスースーと寝息が聞こえた。

振り返つてみると アスナが部屋のソファーで寝ていた。

(・ ・ ・ ・ ・ じゅじゅじゅ～～)

俺の頭は状況についていけないので・・・・・

(・ ・ ・ ・まあ、いいか。)

こんな夜中に起こして事情を聞くのも失礼だろうし、もう一度寝て明日改めて事情を聞くことにしよう。

そつ思いの俺は、再び夢の世界に旅立った。

「うへへん・・・

窓から差し込む朝日がまぶしくて目が覚める。

(あの子は・・・・?)

昨日のジム戦後に倒れてしまつた挑戦者を自分のベッドで寝かせていた事を思い出す。

ベッドを見ると、田中クマを作っている奴の姿が合つた。

・・・・え? なんでクマ?

(・・・・・寝れん! -!)

あの後、結局俺は十分に眠ることができなかつた。何故かと言つ

恐ろしい夢を見てしまい、その後あまりの恐怖に寝たいのに寝れなかつたからだ。

だつて……明らかに世紀末な人がモンスター・ボールを構えて、自身の炎ポケモンあたりを焼き払いながら「ヒヤッハー！汚物は消毒だ――――！」とか言いつつ俺に向かって来るんだよ……怖いでしょ！――つていうかここはホントにポケモンの世界なのか疑問に思ってきたんですけど――！

つと言つ訳なのである……実際過去にそんな人に追い回された記憶がよみがえつてくる。

・・・・あのときも寝れなかつたなあ・・・・

「あの――・・・・・」

と思つていると後ろか声をかけられた。この声はおそらくアスナだろ？。

俺はゆづくつと振り向く。

するとそこにはなんか呆気にとられたような顔をしたアスナがいた。

え――つと・・・なんでそんな顔してるの？

「あのー・・・・・」

私はおそるおそる瓶をかける。

すると奴はゆっくりと振り返る。完全に振り返ったことを確認してから私は質問を始める。

「君の耳に付けているのってカナヅミジムの・・・・・

すると奴はこちらが何を言いたいのかを理解したようで頷く。

(やつぱり・・・・・じゃあ。)

私は懐からヒートバッヂを取り出し奴の耳に付ける。

奴は驚いている様子だったがそれを無視して私は言った。

「おめでとう。」

久しぶりに熱いバトルだった。

戦いの後に・・・（後書き）

うへへへむ、感想・・・というか指摘が無い。
何処を直したらいいのかが全く分からぬ。
つと言ふ訳で悪いところを見つけたらバンバン指摘して下さい。
無論、普通の感想も大歓迎です。

少しづつ、されど確実に物語は動く。

「ガ~~~~~（あ~~~~~）。」

今現在俺は温泉に入っている。

何故かって？ そんなの簡単。 疲れ切った心と体をリフレッシュするためさ！

そんな訳で俺は今、温泉に入っているのだが……。

「ガ~~~~~ア~~~~~ウ~~~~~（あ~~~~~）も
~~~~~ち~~~~~。」

……最高だ。

今までの疲れが温泉の中に染みだしていくかのように疲れが消えていく。

少し熱めの湯に肩まで（何処が肩なのかはよく分からないうが）浸かってゆづくじ過ごす……

やつぱこれだな！ 温泉は最高だ！！

ビバー！ 温泉！！！

ゆづくじゆづくじ温泉を堪能し、俺は今まで（この世界に来る前から）一度も経験の無い砂風呂に入つてみたくなり、一旦温泉からあがり砂場へ向かう。

そこで温かい砂を搔き分け、自分が入れるくらいのくぼみを作ると俺は顔以外を砂に埋めた。

そのとき！－！俺に電流が走った！－！－！

（き、気持ちいい…………）

こうして、ものの数秒で砂風呂の虜になつた俺は至福の時間を過ごしていた。

しかしこの後、予想もしていなかつた事が起ころる。

ガブツ！－！－！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア（いつてええええええええええええええ）－！－！－！」

何だ！？　どうした！－！？　何が起こつた！－！－！？　突然俺の尻に猛烈な痛みが！－！

俺は何が起こつたのか確認しよつと後ろを向く、そして俺の目に入つてきたもの。それは……

「ガア？」

ガブリアス

ガブリアス

何でお前が「ココにいるの？」お前はシンオウ地方のポケモンでしょうが。って言つた「ココは街だよ？」ココにいるつてことはトレーナーがいるの？

と様々な疑問が俺の頭の中で渦を巻き俺を混乱させる。一度深呼吸をして冷静になつた所で、尻を咬まれた痛みを思い出す。

怒りにまかせ奴に飛びかかるつとした次の瞬間。

「こり！ ガブリアス！！」

お怒りの声がする。いくら躰がなつてないからといって、ガブリアスはそれなりに珍しい上にとても強力なポケモン。つまりそのガブリアスを扱うトレーナーはかなりの実力者であることは確実なのだ。そんな腕利きのトレーナーを一目見ておこうとして田に入つたのは本当に、本当に意外な人物だった。

シロナさんじやん……

何故!? どうして!?!? どうしてなの!?!? と再び疑問の嵐が俺の頭を駆け抜ける。大きすぎる疑問のせいでの思考が停止していた俺に対して彼女は、

「じめんなさい。この子、とてもやんちゃで……」

と謝つてくる。それに対し俺は気にしないで欲しいと言つたのがついに首を横に振る。

「有難う。それじゃあね。」

そんな言葉を残し彼女は去つて行つた。……何しに来たの？ シロナさん。だが、今はわつき邪魔された俺の至福の時間、砂風呂をもう一度満喫したいという思いが上回つていた為、その疑問は直ぐに消えてしまった。

その後、俺は今度こそ邪魔されずに温泉と砂風呂を満喫し、最高の一日を過ごした。

「ガブリアス、今度は勝手にどつか行っちゃ駄目よ。」

さつきの「の舞にならないよう」しつかりとくぎを刺す。私はガブリアスがしつかりと頷いたのを確認してから歩き始める。

それにしてもさつきのあの子……

（耳についていたのはストーンバッヂとヒートバッヂ。何故ポケモンが……）

あれ等ジムバッヂとは本来、ジムリーダーと挑戦者が戦い勝利したトレー<sup>トレー</sup>ナ挑戦者に与えられる勝利の証。つまりはポケモンが持っていることなどあり得ないのだ。

（調べてみようかしら。）

そう思い、まず始めにヒートバッヂの管理者であるフエンタウンのジムリーダー、アスナに会うことになりましたがガブリ

アスが再び行方不明となり探す羽目になつた。

あの後俺はしつかり温泉と砂風呂を堪能し、フエンで一晩明かして、  
さあ！ 次の目的地へ出発！！  
てな感じで意気揚々だつたのに……

「待て待て待て待て待て待て待てエ！！！」  
「ヒヤッハ――――逃がさねえぜエ！！！」  
「大人しく捕まりやがれエエエエエ――！」

どうしてこうなつた…………

「マリちゃん！ みずてつぱうだアアアアア――！」

やめて！！ お前らのその外見で！！ 明らかに世紀末っぽいその  
外見と俺を追う時の恐ろしい性格で！！ マリルにマリちゃんなん  
て名前を付けないでエエエエエエ――――――

現在俺を追いかけているトレーナーは三人。 それぞれのポケモンは、

マリルのマリちゃん。

ブビイのブーたん。

イーブイのブレイブイ。

何でお前らはそんなかわいいポケモンしか持つて無えんだよーーーーーーーー

そんなことを思い半ば混乱状態の俺に、容赦無く攻撃がましてくる  
世纪末達。

みずての風、スベーデスター、ひのい、パブル、うせん、かえん  
せりしゃ

正直無口人、公孫二字。

さつきから俺は回避不可能のスピードスター以外は完全に回避して  
る。無駄なPP使って防御するのももつたいたいからだ。  
だけどなあ……このままで無駄に体力が減っていくだけなんだよ  
なあ。……そろそろこっちからも仕掛けるか。

考え付いたら直ぐ実行。それが俺のポリシー。そう言わんばかりに振り向きざまにアクアジエット、速攻で距離を詰めインブイにつばめがえしを叩き込む。見事急所にヒット！一撃で瀕死まで持つていいく。

「ブイブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウイ  
！！！」

倒れたイ ブイを抱きかかえ、涙を流す世紀末の一人。  
これがフツーの外見のトレーナーだつたらイイハナシダナ  
ーになつたのに 見た目つて大事だね

まあ、とりあえずこれで一人リタイアと言つことだ。

必中技であるスピードスターを使えるイ・ブイが消えた今、俺に攻撃を当てることは貴様らには出来ない！！ そんな意思を伝えるかのように俺はひらりひらりと攻撃をかわし続ける。さつきまではスピードスターを迎撃つ為の技を使つた瞬間とかも結構狙われて危ない時もあつたけど…………

それが無くなつた今！ 貴様らは私の足下にも及ばない！！

そろそろ相手をするのも面倒になつて來たので、俺は早々にでんこうせつかで振り切るのだった。

それではさよなら！！ アディオス！！ 出来ればもう一度と会いたくない！！

(ふう～～～なんとか撒いたな。)

俺は川の岸辺で体を休ませている。あいつらはなかなかしつこくてそこそこ体力を削られてしまつたからだ。

とりあえず今日はこの近くに目立たないような場所に穴を掘つてそこで夜を明かそうと思う。

ここは近くに川があるから飲み水にも困らないし、食料に関しても森の中であるため木の実やキノコ、それに川では魚や水生昆虫も採れる。

寝床も決まった事だし、早めに穴を掘つておこう。やつと思つぱつと見では分からぬような場所を探し、穴を掘り始める。

この穴掘りだが、いざれは鍛えてあなをほるに進化させようと思つてゐる。地面タイプの技をたとえ一つでも覚えておけばキンセツジムがぐつと樂になる。そのため時間がある時にはちょくちょく特訓をしているのだが全然上達しない。

時間をかければ自分が入つて眠る事が出来るくらいの空間は作れるのだが、そんなことでは戦闘では全く役に立たない。なかなかアニメのようにザクザク穴が掘れないのだ。穴を掘る時に回転しながら掘つたりなど、色々考えてはいるのだが…………全て失敗に終わつてしまつた。

とりあえず今はあなをほるは保留にしてなみのりの特訓に精を出している。

なみのり。PPもそこそこで威力も命中も十分。ここまで使い勝手の良い技は全タイプ中でも中々無いだろう。

それになみのりはトウカジムのバツチがあれば、海を渡ることが出来るのだ。

……そう！ 海を渡れるのだ！！

それは、ムロやトクサネ、ダイビングまで覚えればルネにも行ける。まあルネには周りの岩をよじ登ればダイビングは覚える必要が無いのだが。

それでも扱える技は多ければ多い程得だ。技のレパートリーが少ないと偏つた戦闘スタイルになりやすく、相手の実力によつてはパターンを読まれてしまいかねない。

それで時間があれば今使える技を鍛えたり、新技の特訓をしていたのだが…………

それでも今回習得しようとしているあなをほるとなみのりは何故か今までの技のように上手くいかない。何が違うのだろうか？

だが今はそれよりも腹が減つた。とりあえず何か食べたい。ココは川なので手つ取り早いのは魚だろ？

俺は川に潜つて魚を取り始める。

この姿になつて初めて魚を取らうとしたら、あまりの簡単さに拍子抜けした。

水の中も驚くほど鮮やかに泳げるし、魚も口で銜えて陸まで運んでゆつくり食べればいい。

火は流石に使えないでの生で食べるしかないのだが、そこまでまずくも無くそこそこの味だったのを知り、水辺に来た時には積極的に魚を食料にしていった。

(しかし……この姿になつて味覚とかも変わったのかな?)

今まで魚、特に生の寿司や刺身はあまり好きではなかつたのだが……まあこの姿からして肉食だと云ひひととは予想出来ていたしな。

そんなことを考えながら穴を掘り続け、自分が入れるくらいの穴が開いたのでどうしようかとまた思考の海に身を沈める。

食料調達は今日はもう出来ない。あたりは既に真っ暗で、下手に出歩くと確実に迷つ。それに夜行性のポケモンに襲われる可能性も高い。

同じ理由で技の特訓も出来ない。それに騒がしくすると、余計に何かが集まってしまうだろう。

と……なると……

寝るしかないか。

数分考えた結果、今日は大人しく眠ることにした。本格的に活動を開始するのは明日からでも良いだろ。

……今日はいろいろあつて疲れた。

疲労も俺の眠気に拍車をかけ、俺の意識は直ぐに闇の中に消えて行つた。

翌日

小鳥のさえずり、川の音、虫の声。

自然に囮まれた中、俺はさわやかに田<sup>た</sup>が覚める。

「グア――――――（ふああああああああ）」

大あくびを一つ、穴の中から這い出したところで、

グルルルルルルルルルル

と腹が鳴る。

……ひとりあえず朝飯の調達に行こうかな。

そう思い川に入り魚を数匹捕らえ食べる。ある程度腹が膨れ、これから何処に向かうかを考え始める。

今、俺はなみのりを習得できていない。つまり、海を渡らなきゃならないムロ、トクサネ、ルネはまだ行けないのだ。

となると自然にトウカ、ヒマワキ、キンセツの三つに絞られてくる。

その中でキンセツは却下だ。今の実力で苦手なタイプに勝てるとは

思えない。

二つに絞られた選択肢の中で、俺はまずトウカに向かうことに決めた。

理由は二つだ、一つ目はトウカジムのバッヂを手に入れなければ、結局戦闘以外ではなみのりは使えず、覚えてあまり意味は無い。二つ目は俺はまだ空中戦、そしてそれがメインの戦術を扱う飛行パイプとの戦闘に慣れていないからだ。

これらの理由により、まずはトウカシティに向かう事が決定した。

決まったのなら後は簡単だ。向かい、戦い、勝てばいい。

勝つためにはどうするか？ 鍛えればいい。

故に俺はトウカに向かいつつ、特訓をすることにした。到着するころには確実にトウカジムジムリーダーセンリに勝てるようになつている為にだ。

俺は川に沿つて歩き出した。心の中で勝利を描きつつ。

「ナマケロー！ ふふきだー！」

「かわせ！ チルタリスー！」

私の指示を聞き、ナマケロはふぶきを繰り出す。相手はなんとか避けようとしたが追い詰められていた為に直撃を食らってしまう。

そして相手のチルタリスを打ち負かす。

「チルタリス、戦闘不能！ この試合、ジムリーダーセンリの勝ち！」

ジャッジが私の勝利を宣言し、挑戦者は自分のポケモンをボールに戻す。敗北がショックなのか少し落ち込んでいる。

「ミツル君、そつ氣を落とさなくていい。君は確実に強くなっている。」

その様子を見て私は励ましの言葉を贈る。

だが、お世辞と言つ訳でもない。事実彼は前回会った時より桁違いで強くなっている。

前回ポケモンを捕まえるのを手伝つて欲しいと頼みに来た時から、三ヶ月もたつていないうのにだ。

「そういえばセンリさん。」

彼から声がかけられる。

「何だい？」

「ジムに挑戦するポケモンを知つてますか？」

「え？」

「知りませんか？」

「……いや、噂程度なら聞いた事がある。」

最近噂になっているジムに挑むポケモン。

カナズミジムとフエンジムのリーダーに勝利したとも聞くが……正直、信じられない。

「何処にいる……とかの噂は？」

「いや……聞いてないな」

「ですか……」

「何故そんなことを?……まさか。」

「ええ。

「実在しています。僕はそいつをゲットするためにここまで強くなつたのですから。」

そう言った少年の目からは、次こそ捕らえる。つと言ひ、氣迫が伝わつて来たような気がした。

少しひつ、されど確実に物語は動く。（後書き）

5000字突破ア！

以前またもや短い！！ と言われてしまいまして…… 5000字を目標にしてみたら？ と言われたので田指してみました。今回は約5100字です。

本当はもっと早く更新できたんですけど、文章が口ストしたり、結膜炎にかかったりして……とにかくいろいろあつたんです。

それはそれとして、漢検＆英検近い。今年じゅけーん。

……何でこんな時期に執筆始めたんだろうか。

これからは最終更新から、一ヶ月の間に最低一話、最高三話の更新を目標にしていこうと思います。それでは何人からかアドバイスをもらい、多少は上達した（ような気がする）私の小説を読んでいただき、少しでも面白いと思つてもらえれば幸いです。

森の中で熊が歌を歌ったね（前書き）

いつも、遅くなりました。  
新設定追加のお知らせです。  
ポケモン同士の会話の時は『』を使います。しかし、これは人間に  
は普通の泣き声にしか聞こえてません。

森の中で熊に出会ったかの歌があったわ

俺は今森を抜け、トウカまで行く道筋を立てる為、必死になつてゲームでのマップを記憶の底から引きずり出すとしている。しかし、俺は愚かだった。ショートカットの為にきちんと道に沿わずに進んだ結果が……

……迷子だよ。

……ビーストかな。これから。そんな事を考えつつもとりあえず進み続ける。

考えたりしていひなるものでもなし、なうば明るいしけん少しでも進んで道に出られればもうけものだ。

それに早くこの森を抜けなければ……

「居たゞ――――――――――――――――――――――――――――

ほらキタ――――――――――――――――――――――――――――

いつの間にかこの森に俺がいる事が広まってしまった、トレーナーが集まり始めてしまったのだ。

「逃がすか――――――――――――――――――――――――――

「ひ、ギヤ——————！」「んな」としてゐ間に5人に増えとるし……

「ガアアアアアアアアアアアアアア（もひこや————）！」

再び俺の叫び声が森に響き渡つた。

ある一ひ森の中くまさんであーつた花咲く森の道ーくまさんに出会つた

……出会いました。リングマ】

どひやら知らない間に繩張りに入つてしまつたらしく……

ええ、既にブチ切れています。額に青筋浮かんできます。……やばいです。つーか何で俺はこんなにも不幸なの？ 右手に何か宿つてんの？ なんでわざわざトレーナー達を振り切つて疲れ切つてこのタイミングでなの？

ゼウしましょ

『ガア————！』

逃げる！ 逃げる！ 逃げる！ とにかく逃げる… やつきまで  
散々追い回されて疲れきっているのだ。こんな状態で戦つても返り  
討ちにあうに決まっている。

今の俺に出せる最高の速度で逃げているにも関わらずぴったりひつついて来ている。確かに知らずに入っちゃったのは悪かつたけどさあ！！！流石に是は無いんじゃない！？

『オラア！！』

きつねくを繰り出してくるが、でん「うせつかで避ける。……うわーお。大木がバキバキと音を立て真っ一つに。食らったら死だな……

俺は巧みな動きでリングマの攻撃をかわし、逸らす。リングマは俺を粉碎せしめんと攻撃を繰り返す。

そんなやり取りが数分続いた。

『ゼーベー

『追い詰めたぞ。』

くそ！ 何で崖なんかあんだよ！ 逃げられないじゃねーか！！

『くたばれ！！』

『 ! ! !

奴はその鋭利な爪で俺を引き裂くとする。避けられない。

うんぐ

## その瞬間

何かの泣き声。

『ヒメ！！』

その泣き声を聞くやにならうとして、そのまま回転を変えて、ものすごい速度で走りだした。

『おい！』

流石に何があったのか気になり、俺はリングマの後を追う。ある程度走った所で見つけたのはトレーナーに襲われる一匹のヒメグマだった。

「よし、いいぞ！ そのままたいあたりだ！！」

トレーナーは自分のポチエナに指示を出す。おそらくはまだ駆け出しひのトレーナーがポケモンをゲットしようとこらめのだわ。

しかし、そのポチエナはたいあたりの途中で吹き飛ばされた。リン  
グマがきあいパンチで横から一撃入れたのだ。

そのきついパンチの威力はすさまじく、ポチエナは木を貫通しながら吹き飛んでいった。7本目を貫通したあたりでようやく止まつた。……あれ、人間だったら絶対死んでんだろ。俺はポケモンの強さと恐ろしさを再認識している間にリングマはヒメグマに駆け寄つていった。

「ひつ……！」

そしてポチエナをボールに戻し逃げだすトレーナー。うん。まあ、  
しうがないよな。俺でも怖いし。

『ヒメ……無事でよかつた。』

お父さん

……」の一人、家族だつたのか。……親父と御袋、心配してゐるだろ  
ーな。こつちに来てからあまりそのこと考えて無かつたけど……

『痛つ！』

『痛むのか！！？』  
『大丈夫か！？』

『うん。さつ木に呪きつけられて……その時。  
『クソ!! オレンの実でもあればいいんだが。』

ん？ どうやら考え事をしている間に話が少し進んだらしい。……  
背中の打撲か。よし。

『つか？』

俺は非常用に毛皮の中に隠しておいたオレンの実を取り出し、一つ等の足下に転がした。

『お前…… やつきの』

『縄張りに勝手に入っちゃった事は謝るけどよ、まずはそっちの子の治療してやんな』

『………… 恩に着る』

『着なくていいぜ。』

リングマはオレンの実をスライスし患部に貼り付けていく。そんな使い方もあるのか……

その上から長い葉っぱを包帯のように巻いて行く。

『来てくれ

治療が終わった後に俺はリングマに呼ばれ後に付いて行った。

『重ね重ね礼を言つ。有難う。』

俺は今、リングマの住処である大きな洞窟の中に入っている。

『だから氣にするなつて。』

『ヒメ。お前もお礼を言いなさい。』

『うん……ありがとーーー。』

『いや……だからいいって。』

この親子は母親がいないよつで長い間一人で暮らしてきたそつだ。しかし……なぜホウエンにはいなばずのリングマ、ヒメグマがコトに。

『そう言えばお前はこんな所で何を?』

『え?俺?俺は……』

### 狼説明中

『なるほど。ジムバッヂを集めて回つてゐるのか。お前だけで。』

『ああ、けど皆強くてな……苦戦してゐる。』

『けど凄いな。もう一人も倒したんだろつ。俺はジムバッヂを見るのは初めてだが……きれいなもんだな。』

『だろう。勝者の証だ。』

『勝者か……』

『どした?』

『いや……』

あの後俺は事情を説明。ジムバッヂを集めている事と、トウカに行く途中で迷つてしまつた事も。すると娘を助けてもらつた礼として一泊させてもらい、翌日に道まで送つてくれると言つ。いや〜〜い人（ポケモンだが）も居たもんだ。

『やつこいやお前は何でホウトンに居るんだ？　お前らはジコウトに居る筈だが。』

『その件についてか……』

『いや……別に話したくなければ話さなくとも良いんだ。無理に聞か出す事はしない。』

『……別にそういう訳じやないんだ。聞きたければ話す……ただ、つまらない話だ。』

『数年前に俺がまだヒメグマだった頃にジョウトでトレーナーに捕まえられてホウエンに来た。』

そこまでは良かつたんだが、俺は超超超ビビりだった。ポチエナの吠えにもビビって足腰立たなくなるくらいのな、それが原因で俺は捨てられちました。

それからほんの森の中で他の野生ポケモンにびくびくしながら暮らしていた。そしてそれから一年ほどたって俺はリングマに進化した。

『ちょっと待て。』

『何だ？』

『何で戦つても無いのに進化したんだよ。』

『知らんのか？　ポケモンは一定の年月を生きると繁殖の為に経験地に関係なく進化できるんだぞ。』

『マジで？』

『まいいい。話を戻すぞ。』

リングマになつても俺は変わらず他のポケモンに怯える日々。それから少しあつてから俺はアイツに出会つた。

『アイツ?』

『俺の妻だ。』

『なるほど……それで生まれたのがこの子か。』

俺は話が始まる前からリングマの膝枕で寝息を立てていたヒメを見ながら言つ。

『そいつと庄介つひから俺の日々は一変した。』

お互に一皿ぼれしてな。直ぐに付き合い始めた。それから少しつて卵もでき、俺は幸せだった。

……だが、そんな幸せな日々は一日で崩れ去つた。

ある日、俺が食べ物を取りにいった帰りの事だ。洞窟のあたりがやけに騒がしかつた。胸騒ぎがした俺は急いだ。そこで見てしまつたんだ。

とんでもなく強いトレーナーとやり合つてゐるアイツの姿を。普段の優しい性格からは想像できないほどの荒々しいアイツを。

俺は隠れた茂みの中で完全にビビリて縮み上がつていて。今思えば情けない。

そしてとうとうアイツはゲットされてしまったのさ。俺の見ていく前で。

そのトレーナーは満足そつと去つて行つたから卵まで持つていかれることは無かつたのだが……

俺は最愛の妻を失つてしまつた。丁度その時だつたよ。ヒメが卵から孵化したのは。

『俺の事を見上げるその小さな体を見たときに決めたよ。俺は妻を

守れなかつたけれども、ヒメだけは守つて見せるつてな。』

『そつか……。』

『おじおじ、何しょげた顔してんだよ。お前が気に病む事じゃない。』

『

『とにかく今日の所は止まつていけ。見ひ、もう田が傾いてゐるぞ。』

『ああ……。』

俺は真っ赤に染まつた夕陽を見つめる。そのとき家族が俺の中に蘇つてくる。

俺は静かに泣いていた。

深夜。真っ暗な闇の時間。夜行性の鳥の鳴き声が静かに響く時間。

俺は夜空の下、星を見ていた。だが夜になつて急に雲がかかつて星が見えない。それでも俺は空を見上げていた。

寝ようとすると家族の事が思い浮かび眠れないのだ。

『眠れんのか?』

後ろから声がかけられた。

『ああ。』

俺は振り向きながら答える。

『言つただろ。あればお前が気に病む事ではない。』  
『いや……違うんだ。俺も家族のことを思い出してな。』  
『お前の家族か……』  
『俺も、黙つて出て来ちまつたから。心配してんかなつてさ。』  
…………  
…………  
まあ俺は自分の意思で黙つていた訳でも出てきた訳でもないんだけ  
どな。……それよりも話が続かない。俺の招待を話しても良いんだ  
うつが……おそれらへは信じてもうえないだろ。』  
『良いんぢやないのか?』  
『え?』  
『別にお前がそつしたいのならいいんぢやないのかつて。』  
『でも……』  
『お前は親を信じてゐるのか?』  
『へ? 何だよ突然。』  
『お前は親を信じてゐるのかつて聞いてるんだ。』  
『そ、そりゃあ……まあ……』  
『ならきっとお前の親もお前を信じてゐるはずだ。』  
『! ! !』  
『お前が黙つてよつが黙つて無かるうがそれはお前が自分で決めた  
道なんだろ? だったら親つてのはそれを気持ちよく受け入れてく  
れるもんだ。』  
…………  
…………  
『親つてのはな、何が合つても自分の子供を信じてるんだよ。無論、  
俺もな。』  
『そつか……有難う。何か色々吹つ切れた。』

『ならいい。お前はお前の道を進んで後から親に謝ればいいんだ。最初は叱られるけどそれもお前を思つての事だ。最後にはちゃんと許してくれる。』

『ああ。』

俺の心を映し出したかのよつて量つていった星空も、今はもう雲は吹き飛び幻想的な星空が顔を出す。俺は再びその星空を見上げた。今度は迷いで淀んだ田ではなく、きれいに澄んだ真っ直ぐな瞳で。

田畠

俺はリングマに道まで案内してもらっていた。洞窟の近くはけっこう深めの森だったのに、歩いて行くうちにだんだんと木々の数も減少している。きちんとした道に近づいている証拠だ。いや～～～助かった。リングマには色々と世話になつた。いつか恩を返さんとな。

『なあ、やう言えば。』

『ん?..』

ただただ歩くのも退屈なので一つ疑問に思つていた事を質問。

『お前さんの嫁つてリングマか?』

『そうだが……それがどうした?』

『ならあんたがホウエンにいる理由は分かつたけど、そのあなたの嫁はどうやってここに?..?』

『それが……何とも田茶苦茶な奴でな。少し長くなるが……』

熊説明中

なんとまあ…………纏めるところだ。

そいつは蜂蜜が大好きでその日もその匂いにつられてきたといふ、大量の蜂蜜を発見。

夢中になつて舐めていたら出入り口が封鎖されてしまった。しかし蜂蜜に夢中で気がつかない。

そいつはジョウトからホウエンに出荷する蜂蜜を積んだ船だった。ホウエンに着いてから発見され、蜂蜜を盗み食いした害獣として追われる身に。

ジョウトにも帰れず、逃げ込んだのがこの森の中。

そこで二人は出会つてめでたく結ばれた…………と

滅茶苦茶ですな。つーかどんだけ蜂蜜好きなんだよ。ホウエンまでばれなかつたのは蜂蜜が箱の中に入つていて、その中にいたから気づかれなかつたとかもあるかも知んないけどさ……臭いにつられて森から港まで行くなよ。

『つと、着いたぞ。』

『え？ マジ？』

どうやら話が壮絶すぎたらしい。俺は自分の世界に入つていた。さて、道にも着いたことだし……

『おー、これまたこいつらの件だ?』

今俺が居るのは俺が少し前に夜を明かした川だ。

『じつもひ事も句も今田はハハド廻る。ここからじー一田以上かかるしな。』

まだそんなにかかるの!?

『俺は木の実を集めて来るからお前は魚を頼む。』

『…………』解。』

『じつもひカソでも舞いいらし。日も傾き始めてこむしな。つーか何時間歩いたと思つてんだよ!…』『ハハから更に一田以上!? ふざけんなよ!…』

まあそんな事を言つても状況が変わる訳も無く……

『魚捕まえるか…………』

俺は頼まれた事をこなすのだった。

森の中で熊に出会ひつむかの歌にあつたね（後書き）

前書きでも言いましたが遅くなりました。

しかし、期限はギリで破つてません。分かりにくく勘違いをされて  
いる方もいらっしゃると思いますので改めて説明をいたします。  
最終更新から一ヶ月以内と言うのは、ポケモンか旅人（これから増  
える可能性あり）どちらかを更新したらその一ヶ月以内にまたどち  
らかを更新する。

そんな感じです。なのでギリギリですが期限は守られています。  
しかし、待たせてしまつたのもまた事実であり……  
すみませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5045r/>

ポケットモンスター 目が覚めたら新種？のポケモンになってました。  
2011年9月23日02時15分発行